

(様式6-A) (Form6-A) A. 雑誌発表論文による学位申請の場合

Ankhjargal Zanaa 氏から学位申請のため提出された論文の審査要旨

題 目 Childhood Tuberculosis in Mongolia: Trends and Estimates 2010 - 2030  
 (モンゴルにおける小児結核：2010年から2030年までの動向と推計)

雑誌名 The Tohoku Journal of Experimental Medicine; 2022年 (in press)

著者名 Ankhjargal Zanaa, Sekar Ayu Paramita, Oyunchimeg Erdenee, Bilegtsaikhan  
 Tsolmon, Anuzaya Purevdagvaa, Chiho Yamazaki, Mitsuo Uchida, Kei Hamazaki

## 論文の要旨及び判定理由

モンゴルは、2021年には結核の高負担国（結核高蔓延国）上位30カ国のひとつに挙げられている。結核患者のうち約10～11%が子どもで、世界平均（6.0%）よりも高い。小児は脆弱な集団であるため、現状を把握し、結核予防戦略の策定を優先することが重要である。しかし、モンゴルの年次健康指標には、戦略策定の基礎データとなり得る同国の小児結核の傾向や推計値が示されていない。そこで、本研究はモンゴルにおける小児結核の特徴について記述統計を行い、その傾向や推計値を示すことを目的とした。2010年から2020年の期間に首都9地区と21州からモンゴル国立感染症センターに報告・登録された合計4,242件の小児結核症例について記述的分析と傾向分析を行った。その結果、結核は学童期に多く発生し、全症例の71.8%が肺外結核で、小児結核は2018年以降、変動を伴いながら継続的に増加していることが明らかになった。地域別にみると、首都ウランバートルを含む中部地域で最も結核の罹患率が高かった。傾向分析では、2021年から2030年にかけて全国の小児結核は増加傾向にあり、中部地域では増加するが、その他の地域では減少すると推測された。地域差の決定要因を明らかにするためにさらなる研究が必要であり、高蔓延地域では大規模スクリーニングや予防的治療など、年齢別の公衆衛生介入が求められる。本研究は、結核高蔓延国であるモンゴルにおいて対策が遅れている小児結核に注目しており、モンゴルの今後の結核予防対策の検討や政策決定をするための基礎資料となり得る意義のある報告と認められ、博士（医学）の学位に値するものと判定した。

(審査 令和4年7月6日)

## 審査委員

主査	群馬大学教授（医学系研究科） 肝胆膵外科学分野担任	調 憲	印 (signed)
副査	群馬大学教授（医学系研究科） 小児科学分野担任	滝沢 琢己	印 (signed)
副査	群馬大学教授（医学系研究科） 臨床検査医学分野担任	村上 正巳	印 (signed)